

「読みログ☆3つ!ぼくの好きな○○くんを
しょうかいしよう」(2年生)
「一番友だちになりたい○○さんを
しょうかいします」(3年生)

授業のポイント

発行
令和4年2月
中部教育事務所
授業者
五十嵐彰英教諭(津野町立精華小学校)



本単元で身につけさせたい資質・能力 「読むこと」 考えの形成
ウ
◇第2学年 「読むこと」において、文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもっている。
◇第3学年 「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、感想をもっている。

教材
第2学年 「お手紙」(東京書籍2年下)
第3学年 「モチモチの木」(東京書籍3年下)

①付けたい力を確実に付けるための教師の手立て

教材研究会より

6月に行われた教材研究会において本単元の指導について3つのことが提案された。

〈1〉2年生のスタートと3年生のスタートをずらしている意図は?

→意図的に単元のスタートをずらすことで、教師作成のモデルから単元のゴールを意識させ、児童が課題意識を共有し学習を見通す姿を丁寧に見取ることができるようにするため。

〈2〉学習過程を重視した単元計画

→3年生は単元後半に豆太の性格について考える場面を設定しているが、「自分だったら」を考える時間の前に、複数の叙述を結び付けて豆太の性格を考える精査・解釈の学習過程を踏んだ方が、考えの形成にスムーズにつながるのではないかと。

〈3〉重点指導事項にかかわる教師の手立て

→考えの形成に向かって、それぞれの児童がどのように自分の体験と結び付けていくのが難しいと思われる。教師の手立てが必要ではないか。

以上、3点をもとに指導案の加筆・修正を行った。(右図参照)

2年生の重点指導事項、「文章の内容と自分の体験を結び付けて、感想をもつこと」にかかわって、登場人物の会話文、行動を手がかりに具体的に想像し自分の体験や経験を結び付けて感想をまとめる際、以下のような身近な知識や体験の観点を示すようにした。

- ・もし自分だったら…
- ・友だちにやさしくしてもらった体験
- ・友だちとの思い出(こんなことがあったよ、など)
- ・似たようなお話(ふたりはシリーズも含めて)を読んだこと



キーワードを使って自分たちでまとめる。(3年生)



3年生交流の様子より

指導と評価の計画より(一部抜粋)

6 指導と評価の計画(全12時間 本時5/12)	2年「モチモチの木」	3年「モチモチの木」
【評価規準】(評価方法)	見方・考え方を働かせる子どもの姿	見方・考え方を働かせる子どもの姿
○学習活動	○学習活動	○学習活動
時次	時次	時次
1	1	1
2	2	2
3	3	3
4	4	4
5	5	5
6	6	6

単元の導入をずらす

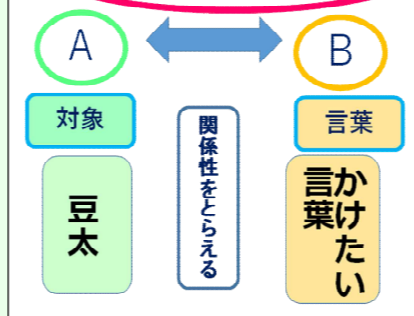
精査・解釈

考えの形成

考えの形成

言葉の働き・使い方

考え方



中心人物の境遇や状況を把握し、複数の叙述を結び付けながら、考えの形成に向かう姿が見られた。

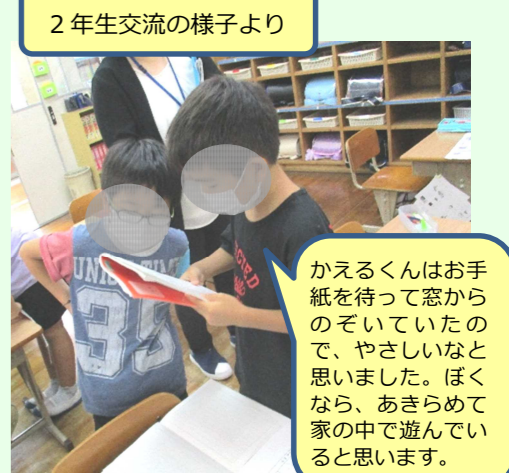
②本時で働く見方・考え方とは(授業研究会3年生より)

本時は、自分の好きな場面の豆太にどんな声をかけたいのかを考え、文章を読んで理解したことに基づいて自分の感想をまとめ表現した。
本時で働かせたい見方・考え方とは、「かけたい言葉」という視点で豆太という対象を捉えるという考え方である。見方・考え方を働かせている児童の姿とは、友だちになりたいと思った中心人物にどんな言葉をかけたいのか、それはなぜかといった関係性を捉えながら、これまで読んできた「モチモチの木」の場面と場面を結び付けて読んだことをもとに、自分の考えを形成していく姿である。授業研究会では以下のような児童の発話があった。
A児：豆太に「がんばれ」と伝えたいです。なぜなら、3場面では調子にのっていた豆太だったのに、じさまが倒れて夜の道が怖かったのに走ったところがすごいと思ったからです。
B児：ぼくもかけたい言葉は「がんばれ」です。でも理由が違って、1場面では一人でせっちんも行けなかった豆太が、なきなき走ったなんてえらいと思ったからです。



1セット目を終えて
授業者 五十嵐教諭の振り返り

★4月から授業づくり講座に取り組む中で、子どもたちに目的を持たせる重要性を学んできた。毎時間単元ゴールに触れ、「～のために」とゴールをはっきりさせることで、やるべきことが子どもにも自分にも見えてきた。
★話型がなくても、自分の思いを語れるようにしていきたい。そのためには、日々の授業から「叙述をもとに考えさせる」ということに今後も取り組んでいく。



2年生交流の様子より

かえるくんはお手紙を待って窓からのぞいていたので、やさしいなと思いました。ぼくなら、あきらめて家の中で遊んでいると思います。



☆講座に参加した先生の声
・国語科についてじっくりと研究する機会が初めてだったので、とても勉強になりました。つけたい力を意識して単元ゴールを示し、1時間1時間それを達成することができたか、自問自答しながら授業をつくりあげていくのは大変だけれど、とても魅力的に感じました。
・国語の単元構成の仕方や言語活動のポイントなど、本講座で学んだことを同じ職場の先生方にも伝達して学校全体で授業力を向上させていきたいと思っています。

③講師による助言・講話より(前鎌倉女子大学准教授 松永立志先生)

複式学級において鍵を握るのは「主体性」である。では、主体性はどこからくるのか。ここでは、相手意識・目的意識を子どもたちに発揮してほしいところでもある。「紹介する相手に、どんな反応を期待するのか」を児童が意識することが大切である。お話を紹介された人(相手)に、「おもしろそう、読んでもらいたいな」と思ってもらうために児童が(どんな方法でいこうかな。)(自分のどんな体験をだそうかな。)と考えていくことが主体性となっていく。
複式学級の「間接指導」を「直接指導」につなげるためには、いかに「間接指導」の時間を効果的な時間にすることができるかを考える必要がある。そのためには間接指導の際に言語活動における活動主体のリーダーの存在も欠かせない。例えば、「次は～をしましょう。」だけではなく「注意点は～に気を付けて考えるのでしたね。」と声をかけたり、「みなさん、終わりましたか。」だけではなく、「途中まで確かめてみましょう。何か困ったことはありませんでしたか。」と尋ね、「ぼくは～で困っています。」という意見が出たら「じゃあ、○○さんの困りごとをみんな考えてみましょう。」というように、活動でリーダー的に動くことができる力を、どの児童にも育成していく必要がある。